

はき 2082 49
2.078^P

受 0 はたのり 紀下192^P

すみえ
住吉の小島での嘆き

能り帰る 梯僦を乗せた船は、華やかな

旗旗をなびかせながら、泊瀬の白川の流水を

下っていった。

女王の夫・梯僦に従う船が、幾艘とも知れ

ず連なりなり、笛や太鼓の軽快な調べが脈やか

に鳴り響いた。

晴水やかな門出であった。

龍田山を右手に見ながら下り、やがて梯僦ら

は、白川の河口に至った。

海辺にはすでに、豪華な外洋船が用意され

ていた。

*

ひき
悲しみ
2086
99

無情 2046^{1/2} 無情 2151¹

「帰還」は少い。→ 2081¹ 287 (9411)

2079¹

おのえ 住吉 万1-159¹
おのえ 墨江 万2-385¹

おのえ 瑞江の人紀上497¹

浪速の入江の対岸には、住吉(墨江)の小島があ
つて、……その懐か……い島が、見ろ見ろう
ちに近づいて来る。
「伊聲者振邪狗(月談命)殿。どうかあの
島に、この船を寄せては下さるぬか。いま一
度あの住吉の小島に還つて、名残を惜しんで
またいと思ふのです」
梯儼は声はすませと言つた。
振邪狗は、もつともなうだと思つた。そ
こで、主賓である梯儼のそのささやかな願
は実現することになった。
長らくの間、……でも果せなかつた住吉。
の館への帰館が、……いま、やっと叶うのか
と思ふと、梯儼は嬉しかった。
……かし、梯儼の喜びは、その直後、無情に

2080^P

事情 969^P
事の次第

二と

万2-385^P 改行
万2-385^P 改行

も打ち砕かれた。
住吉の島から忽然として家が滅せ、垣
根さえも消え去っていた。それだけ
ただあつけにとられ、呆然とするばかりだつ
た。(万巻九一七四。参照)
「これは一体、どうした事か。赤女
赤女よ。死んでしまつたという可哀相な赤女
よ。赤女の身に何が起こつたのか詳しい事情は
分らないけれども、まゝと辛いめにあつてい
たのだろうなあ。――」
梯子は「気が抜けたように佇み、目頭を押
さえながら、そつと呟いた。

*

振邪狗年8人

不瑞因(宇治因)→やぐこいから止める

赴き

2,081P

新町科室名 146°
佐賀(市色)
地名
2127 宇治
146°

記に「末羅」とある。帝口地名 1444°
5万分の地図に記載 松浦郡
うづうつ 2042° 比土並 2043°

愛姫と我が子を残して

人に語れない恩恵といた日々が打ち続くう

ちいつしか梯僦を乗せた船は、末盧国

肥前国(東松浦半島) 仮屋湾 最北端の だ着りて

いた。ここは丁度、丹後国竹野郡網野村に

神社の所在位置に相当するところである。梯

7 そうですか梯僦殿、よく分りました。梯

僦殿お一人をここへ残して行くのは忍びなく

とですが、止むを得ないことで御座います。

参拝したらずい舞い戻ってきますので、暫

くの間、この地でお待ちになつていて下さ

い

伊聲者振邪狗は、こう言うと、従者ともども

き連れて、香椎の方へ去っていった。

再び船に乗り込み

電 2086 5分

電 2086 5分

電 2086 5分

(241)
由2009' 男児正始2年(現10月頃)出生か? 心懐かい
正始4年(243)4.5月 後半<5.1. 元金788'至(2,082'P

電
ふけ
取、ていたりを
さて2079'「て

ただボンヤリと

後に残った梯儼は、為す事とてなく、日が

な一日、ただ休いとて、茨田に打ち寄せては

返す波を眺めていたり、あるいは宿所に引き

つ籠って物思いに耽っていたりした。

はてさて、どれくらいの日数が流れた頃だったろ

うか、ある日

「梯儼さま」
病み臥したように寝そべっている梯儼の耳

に、ずうっと以前聞いたことのあるような

妙に懐かしい響きを含んだ女人の声かきこえ

た。

(~~~~~)

物憂げに、ゆっくりと頭をめぐらした梯儼

の、その空な目にうつったのは、

何と、あの愛姫と、手を引かれている幼子の姿

だった。

「おお。そなたは愛姫ではないかし

」
おなつかしいうございませ。梯儼様。私、

た。そして父親の膝の上で遊ぶその子の仕草
には、まだ数えで三つ（満でいえば一つと数
ヶ月）ながら、頼もしくも利発さが窺われ
た。

「ね、梯僊様」
愛姫はひたすらな思いを込めて言った。

「私、この子と一緒に海を渡るつもりでこ
にまでやって参りましたの。是非ともお連
になるだろうとは思いますが、是非ともお連
れにただきとうございます」

（――）
梯僊は返答に困った。
梯僊には、――己の行く末のことが、そ

となく察せられるように思えるのだった。
そして、――
「へ、決して愛姫を伴って帰国してはならな
と、胸の内に直感した」

「いや愛姫よ。そなたの心はとて嬉し
のだけれど、――私は、二人を辛く目に会わ
せたくない。愛姫たち二人にとっては、この
倭国こそが一番住みやすいところだと思

560, 3.11④
2,085^P

こと

3つ目の梯傷④ 2086^P
神社

だよ。それに私は、そのうちきつと倭国へ戻
つて来る。――始めにたどり着いた末盧国
のあの海岸へ戻って来ることになるかも知れ
ないね。何か、素晴らしい手土産を持って帰
ってくるから、楽しみに待っていてお
くれ。
梯傷は、つとめて明るくふるまいたから言
った。
愛姫は泣いた。
そのようなことをおっしゃらずに、連水
ていつて下さる。
愛姫は泣きながら梯傷に承諾を乞うた。
しかし――梯傷の心は変らなかつた。
*

こと

2.086 P ②427 悄然 1099 P 帳 397 P 3-91 帳 397 P 3-91 香椎 ②2081 P ②2078 ②2084 ②2085 P 39

やかて、伊聲者、振邪狗等が、香椎から戻つ

てきた。

梯は、岸に愛姫と我が子を、伊聲

者、振邪狗等と共に、瀬海へ玄海のかたの国

を、目指し、沖の方へ、遠ざかつていった。

愛姫は、遙かに離れ、ゆく船を望み、

涙にむせびながら、声も限り、呼ばわり、領

中を脱いで、水を打ち、塵り続けた。

別れを嘆き、悲しむ、愛姫の魂は、まさに消え

入らんばかりであった。

傍の者は、そのいたまに、皆涙を流し

た。

(万巻五十八七一参照)

②-91 佐田の底説 ②-91 ②2081 P 189 ②2078 P ②-91

$\rightarrow 44, 1, 11 (\pm) \textcircled{6}$
 $410, 8, 13$
 $412, 4, 21 (\pm)$

たいさい
大慶 1332^P
大ッ親 1332^P

ととろ 76
渡唐 1610^p

洛陽へ

朝鮮半島 西岸 沿いに

渡魏の船は、
瀚海の怒濤を押し
渡って北上

し、―――やかて、梯てい檣じやうにとつてなつかしい

船を降りた梯儁は、大夫伊聲耆振邪狗等を

案内して、帯方郡の郡衙へやって来た。

を求めた。
左の
旨願心出た

「倭国からの朝貢の使者が参った」というの

カ

弓澤は、客人達を請い入水た。

舌さわやかに口上を述べ始めた。

た私・建中校尉梯儁、ただいま無事に任務も

果ては少しもお憂わり加なく様之水、大慶愛

至極に存じ上げます。倭国の状況等につきま

け 致し ました通りでございます。 倭国は礼儀

→ 441.12(日) ⑥
三菱政務と勤

せい 云 1221 P
正使 主任の使者

けなげ 小林
健気 696 P

坂本 50 P 主君
假交 仲義 2314 P
(律儀)

2.088 P

言 申せ

き尊い
とと

国。魏国の盟邦として誠にふさわしい国で

あると申せましょう。

この度は、魏国への返礼の為に、いままた

倭国から朝献の使者が遣わされ、こうして目

通りを願って、いるのでございます。

だが、太守乃尊は、その口上を押しとどめて後

を言わさず、倭国からの使者である大夫伊勢

者、叛邪狗に向うと、手を取らんばかりの好意

を示し、こう言った。

「倭国は律義な国です。三年前の詔書。

印綬などの假授の儀に、応えるため、こうし

て、返礼の使者を遣わすとは、さすがに誉れ

高い倭国の女王卑彌呼の名に、恥いけません。

遙か僻遠の絶島であるにもかかわらず、

多大の労を、厭うことなく、天子に詣りて再

度の朝献を願うその殊勝な心遣い、心底より嬉しく

存じます。けなげな麗しい心かけであります

す。

帯方の太守乃尊は、―――実は、先に戻って

きた使者達から、こう聞いていた。

「建中校尉梯儁殿は、魏国の天子のとしての大

名代

い
奇立たーそうに

147 元
使節 974P
使来 1909

磨り減り 元 1210P
二

2.089P-1/2

急慢 元 1349P

懐柔 元 353P
遂行 1171

2002-3/4
大阪 元 1350P

というのだった。

役をかえり見ず、その身を慎むこともなく、
ままに倭国の女達をわたり歩き、とうとうつ
いには自らの任務を放棄して倭国の人となつ
てしまわれまゐつた。
魏国の政略上極めて重要な公東夷の国に倭
国の懐柔策を、当然魏国の立場に立つて遂行
すべき筈の最高責任者梯儁が、
めを無視し、無断で職務放棄したのである。
急慢は、つまりところ梯儁の上司である帯方
郡の太守弓遵の過失でもあった。
この恥おびき事実の爲に、帯方郡太守弓遵
は、魏国の朝廷に対して、どれほど神経を磨り
減らしたのか。
弓遵にとって、梯儁は疎ましく存在でし
かなかつた。
と、ところかどうしたというのだろう。その梯
儁が、今ごろになつて倭国からの使節達に便
乗し、臆面もなくノコノコと帰国してきたの
である。

取り計らう

2.089^P - 2/2

生口 2065^P 99 天つき
魏太後 51^P 改行

へまだいも、先倭王の娘の夫であり続ける
ならば、魏国にとつてそれなりに功績がある
と評価し得よう。ーかし、その女のもとを離
れ、尾羽打ち枯らして帰ってきたこの男に
何ほどの価値があろうか
帯方郡の太守弓遵は、梯儁に目もくれず
魏国の天子に服従の意を示す倭国の
女王の心ばえを大いに賞嘆するのだった。
なお、
洛陽の朝廷へ参内するに当り下仲介の勞
をとつてもらや、朝貢の便宜をなにくれとな
く取り計らつてもらう為
邪狗等が持参した品々のうちのかなりの物が
帯方郡太守弓遵に進上された
と解しても、あながち誤っているとはいえま
多分
大夫伊聲耆振邪狗に従つてきた其人等が、
東南大海の中の絶島に産する珍しい品を、
厳そかに、次々運び込んだとであらう、
と想像される



老臣振邪狗の項において既述

2065^P 99

431(2019)1.19(土)~1.19(3日)
4402(2020)2.22(日)~2.24(3日) 8に水 1664 使節 974P
442(2020)10.16(土)~10.18(4日)

2090P
2142P
2141P
2161P
2181P
女王の出現 299P
三回文(II) 紙巻 303, 308P
叛乱 1844
反乱

やや早すぎ(る)けれど

魏志(57頁)

ここに、予め述べると、
これより三・四年後(正始七年または八年)
に、韓人が叛乱して帯方郡の崎離宮(兵營の
名か)へ攻撃をかける。
そこで、帯方郡太守の弓遵と、樂浪郡太守
の劉茂とは、兵を起して征討を行う。
だが何と、弓遵は、そのとき戦死する。
とはいえ、帯方・樂浪二郡の軍は、ついに
韓を亡ぼす
ことになる。(「三国志」へ韓伝へ倭人伝へ
正始八年条参照。後述)
* いかし今、そのような未来の出来事など誰に
も分かるはあかな。
帯方郡太守弓遵のなにくれとなし怨な心尽
によつて、倭国の女王が遣わした朝貢
の使節一行は、無事、魏国の天子の居所洛
陽に到着した。
「魏国の首都」なつかしい洛陽の都を、もう
一度、しっかりと目で確かめておきたい
と言う梯儁もまた、花の都洛陽へとやってき
た。

下
米

やまとの(市)
2141P

(2)

前日 2100

243年12月
三〇日 116P

④ 2107²-1/4 天
2,091^P

まよう
奉行 583^P

いせいや 店113^P
為政者 政治を行う者

梯僦の悲しさつゝのる

到着した洛陽の都では、まことに煩雑な種々の手續が必要であった。

「倭国から、再び朝貢の使者達が来た」という朗報は、やおら取り次がし、
持ち上げられていった。
朝廷内の中樞部

「朝貢の儀式は、本年（正始四年）十月

二月に奉行される」という事が伝えられてきた。「三国志」魏書曰三少帝紀、第四へ香王紀、正始四年（二四三）十二月条参照

一方、洛陽の都へ帰ってきた梯僦は、どのような思いを抱いたのだろうか。なつかしい思い出と同じような幸せをみしめることが出来たであろうか。

否。朝廷の扱いは、以前にも増して冷や

④ 2104¹
4行
11618
2023/1/18
であつた

未練 2092 未練 2139 世知平 計算的であること。

一救 126 1995

560 9行

2097

かた

道

数年

に出

会う

旧知

さえ

視線

を

顔を

知らない

ふ

リ

一瞥

も

通り

過ぎて

行

い

権

者

に

媚

諂

世

の中

な

つ

て

いた

ろ

陽

の

有

様

合

は

いえ

あ

まり

にも

嘆

梯

雫

の

失

望

は

た

梯

偶

は

よ

ん

や

は

り

こ

の

ろ

れ

か

ら

本

土

未

れ

か

ら

本

土

未

よう

と

つ

ぶ

や

い

と

つ

ぶ

や

い

た

そ

れ

で

は

伊

聲

そ

れ

で

は

伊

聲

そ

れ

で

は

伊

聲

そ

れ

で

は

伊

聲

そ

れ

で

は

伊

聲

そ

れ

で

は

伊

聲

64X 帰り出す

(和歌の行とという前)

沸水7回

珠水は江永の支流 曲阜
東洋史研究 171P. 225P

74
7L7 738^P

孔子の居所長江は27401⁷

⑦ 2114P

2,093^P

望泉小林678⁹

明日之泉 57P 11L 2093⁺

山重元927

77,645

同川 凡士元 470
管川 紀上 497

もとつた つかは 本
本土の⁵同川の郷
本土に47.3°

十二月の朝貢以前

うかこの都で御ゆるりとお寛ぎになつていて
出来るだけ早めに戻つて参ります故、と

下
さ
い
L

梯焦はこう言うのと、二親を恋慕い

父母の居る本土の郷
〔筒川〕へと

急
いた
○
丹後国風土記逸文
瀬嶼子
条参照

いまでもなく、
梯儼の故郷が、
中国の何処にあつたのかを

詮索して
 みても、
 真相の
 確認は
 困難で
 ある。

たがぐあえてこの物語では

山東省泗水県の「盗泉」という泉あたりが下

りの郷のこをであつたろう

と仮定し、話を追めてゆきたい。

参考迄に述べてみようで
(山東半島基部)

春秋時代に魯の曲阜に生れた孔子は、「

泉（せん）
と
う
名（な）
を憎（にく）んで、
その水（みづ）を飲（の）まなかつ

た
と
い
う。
〔漢和辞典、小林信明、小学館〕盗泉（とうせん）

その源泉のあるところを流れる水

と
い
う
川
は、
孔
子
の
居
所
の
下
流
で
洙
水
を
合
せ

江蘇省で淮水に注ぎ込んでゐる。

2 一方、肥後国ヒノ合志原カサハの地チの都城推定地トイハナス内チ

東北^{いまいち}域^{たい}一^い帯^ちには
河^い水^{すい}（町）
と^ちい^{めい}う^{めい}地^{めい}名^{めい}が^{めい}あ

地籍766⁷ 初卷
97页

→ H4.1.14 旧考書後233 紀下228 第巻416PT
⑤ 紀下229

2,095 「乙」=0頁18

人オズ1149 才知ある人物
人89429 徐福 3537 646 288
オ士 288
ゆうい 有為 2243

山東地方は
も鄭玄（儒学者）をばしめとする有為の人才
が統出し、当時の最先進地とみなさるるほ
いの高い文化水準を誇っていたのだ。（東
洋史辞典）創元新社へ徐福✓へ方士✓へ山東
人名大事典しむさし書房へ鄭玄✓参照
5 さて、梯儂が山東地方にゆかりのあ
る人だったならば、梯儂は幼い頃からそのよう
な香り高い独特の文化に接し、東海の
海中にあるという神仙の国に憧を抱いていた
とも思われる。
また、正始元年（二四〇）帯方郡の太守
弓遵から、東海の神仙の島、倭国へ行く
ように勧められたときにも、梯儂は何の躊躇もなく
快く承諾したとであらう、と推察される。
6 さらに述べると、舒明紀四年（六三二）十
月四日条に、
唐国の使人高表仁等、難波津に泊り
とある。（第一巻末尾の年表参照）
そして、高表仁について旧唐書倭国伝には
新州（今の廣東省新興縣治）の刺史（史）
高表仁を遣わし、云々

毛刺史

懐かしい 1660

5file 2096
通小町 日本民謡集
凡古に473
かきかき 369
行き合ふまあう、いきあう
月土に473
2096
長い長い 2100
2131
13/13

「日本書紀」(下) 日本古典文学大系、岩波書店、

と記されてゐる。二九頁注二五。「岩波文庫」五五八、九、三三頁、

・高表仁は、^{かんじん} 廣東省出身だつたのであろう。

このように、^{ちほうしゅん} 地方出身の者が使入として遣

わされることも、多々あつたことと思われ

・古代の中国では、^{ちほうしゅん} 地方出身者を使入

として諸外国に遣わす場合が多々あつたの

かも知れない。

梯儼は、^{ていげん} ベセカされるままに、^{もとつくに} 本土の郷へと

急いだ。そしてほどなく、^{おさる} 幼い頃を過した懐か

しい^{とうせん} 箭川(盗泉)の郷へと到つた。

いかに、なんと、^{むらざと} 村邑を、^{ながみ} 瞻眺するに、元吾た

家はなく、^{みち} 道に行きあう人は皆、^{かみ} 顔も知ら

ない者ばかりであつた。^{なが} 長い年月を経て、^{かみ} 顔

貌がすっかり変わつてしまつていたのだらうか。

即ち、^{ひと} 人と物とが遷り変わり、^{ぜんぜん} 全然たより

どころもないのだつた。

それは哀しくも、

乙姫さまにたがいて、^{うみ} 浦島太郎は三年

を、^{みやうじょう} 竜宮城で暮らすうち、^{わが} わが家が恋

くなりけり。

478 240 238 300年 2-385 12月 473 472

477 2097

473 5月 2096

「思ひ出の愛唱」歌集 野ばら社 一九六三年六月発行 一四六七頁

帰って見ればは如何に 元いた家も村
も無く、道に行きあう人々は 顔も知ら
ない者はかり。
と、歌に歌ゆゑとありであつたのたう。
父や母は、今、何處にあるのでしようか
そして、父母を頼つてやつてきた弟の私
や子供達は、どこでどうしてゐる
私の家人の身に、何かあつたのでは
ありませんか
梯は通りすがりの郷人に尋ねてみた。
すると、その郷人は、答えてこう言つた。
あなたは一体何處に行つていらつ
たのですか。あなたの御両親はもう
舊遠の人になつておしまひになつたの
です。お可哀
相に、お二人は生きておいでの先世に
独り蒼海に遊びに出たまま再び還つ
てこない子を案じながら暮らしておい
たつたというのに、あゝから三年も経
つた今頃になつてこの郷へ帰つて来
て、何でまたそのようなのを平然と
顔をお尋ねになるのでしよう。
そして奥の方から、独り蒼海

478

せいき 元 1217' 精気 元 189P
失せる元

せいき 元 513P 八士記 474P
旬日 1217' 474P

ぼんやり 2108 2/2 1217
おー 2102 2017
2.099P

張 (みなき)

かつて梯僦にみなきつていたあの精気は、
すてい 失せはてて、すつかり気落ちした
虚脱の日々かつづいた。

梯僦は、時折、ふらりふらりと放べの様子
で、郷里を廻るのだったか、しかし、ただ一の
親いき者にも会えず、既にいつのまにか旬日
か、逕きまわっていった。(「丹後国風土記」)

文へ八浦嶼子(条参照)
な、お、卑爾呼の夫君梯僦が貧乏人だった筈はない。軒屋
を買ったとるなり、間借りていたのだろうか。

白煙り
「ああ、無性になつかしい」
切なく

ぼんやりして、まったく取り留めもない
梯僦の脳裏に、いきりに去来するものがあった。
た。

それは、あんなにも心楽しかった邪馬台国
での事共々だった。
東海のはての大海原に浮ぶ龍宮城。舞い踊
る赤女や比目魚(愛姫)。そしてあの麗しくも

H10.8.13.

うっぴ
2135
快便

みやび
雅やか 2135

2,100 P

昔 2091

亀山

2025, 458 P

木

神秘的な謎に包まれた乙姫や、賑やかな朝臣達。目に浮かぶのはみな美しく、楽しい想い出ばかりであった。
い不思議な夢を見ていたような気がしてならなかった。
いや、今も、その夢の中に浸っていたかった。ところとろと微睡む梯儼の心は、常世の方へ立ち渡る雲に乗って、天翔り行き、――
そしてあの東海の亀山（リ蓬萊島）に至るや
昔のままに亀比売と語り、神仙達に囲まれて、雅やかに楽しく時を過ごすのだった。

①1907-3/4「見入った」②2083

2,101^{P-1/2}

2/05 16時

どれ程の時が経った頃だろうか。
ひいやりとつめたい秋の冷気だ、梯儂はぶ
るぶると震えを覚えて、目を覚めた。
へそうか、夢であつたか。私は、中国へ歸
つてきていたのだ。た。た。た。
独り小さく咳きながら、梯儂は目をこすつ
た。
と、その時、梯儂の目に止まったもの
があつた。それは、龍宮城の乙姫から土産に
貰つたあの玉手箱であつた。
「あの小箱の中には、一体、何が入つてい
るのだらうか」
梯儂は、その玉手箱を手にとると、あらた
めて、つくづくながめた。
だが、玉匣は、――何も知らぬ氣に、美
しく、目映く輝いてゐるばかりであつた。
ここに梯儂は、別に何というこゝともなく、
ごくあたり前のさうなように、箱の紐に手を

(2)

2, 101^P - 2/2

「二人の身に」
と(文獻はない。)

④ 2075^P ~ 6^P - 2/2
そそろ 元 1308^P わけがないこと

かけていた。
ところか、^きもそそろに^{ひも}紐を解^{ほど}こうとした。
その瞬間、^{ていけん}梯儼はハツとして思^{おも}い出^だした。
「そっくりえば、^{わか}別^{わか}水^{みづ}際^{ぎわ}に^{かめ}亀^{かめ}比^ひ売^ひは、^{けつ}日^ひ決^{けつ}してこの玉手箱の蓋を開けな^いでほ^いしい^ひと^かか^い日^ひも^いもこの蓋を開けたら、二人の身に恐ろしい禍が降り懸かる^ひと^か申^{もう}してお^いで^だつた。どう^いう^いう^いと^も意^い味^みな^なの^か「今もよく分らない^か、^いや^はり、^あ開^あけ^ない^ことは止^とま^らな^い方^{ほう}が^いい^のか^も知^しれ^ない^し」
紐を解^{ほど}こうと^して^いた^その^て手^てを、^あめ^てて^い押^おし^とめ^め「ほうっ」と溜^た息^あを^つい^た梯儼は、小箱を元のところに戻した。
ハしかし、私の身に禍が降り懸かるといつても、この私にこれ以上のどんな禍が降り懸かるといつたの箱ではないか。この箱の蓋を開けたからと^いつ^て、^うま^のか^なた^の乙^お姫^{ひめ}や私の身に禍が降り懸か^ること^があ^らう^か✓
自問自答する梯儼の胸に、執拗なまでの迷^{まよ}りか黒雲のように広がり、そして自^じ制^{せい}の^こ心^こが

かんかん
顔面 2507
→ 560.3.21 (日)

えたいえ
為体 237P

2,102P

玉匣を携て 474P 物思ふ 足に刺る いとおしい 2196P
「しか」前頁 2198P 何となく懐かしい
138P

急速に影をひそめていった。
梯僦の手は震えながら、再び、あの玉手箱
の方へ伸びていった。
「亀比売。亀比売よ。私のいとおしい亀比
売よ」
梯僦はその箱をしっかりと胸に抱き締め、
懐かしげに優しく撫でた。こうしてなお暫く
の間、ぐずぐずと躊躇っていたか、――やが
てついに、思いを決めたかのように、玉手箱
の紐の結び目をゆるめた。
丁寧に結ばれた玉手箱のその紐を解き終え
と、梯僦は手にした小箱の蓋を、そうつと下
――開いた。
サツ、と日の光が小箱の中に差し込み、何
かがキラツ、と光った。
「あっ」
梯僦は思わず手にした小箱を取り落した。
全く予期してない時に、強烈な閃光を、
まともに顔面に受けたのだった。
ボーツとした梯僦の目に――箱の中か
ら何かしら、
為体の知れないうるさな白い煙

かたみえ 形見 423
 H10.8.14 水戸の日
 H14.1.15 日
 思ひ出 474
 品、
 出物(三笠神印) かななく 2380
 八土記 474
 2,103^P

ちか 哲 日 1420^P
 たか 高 鳴る 1358^P
 おおひし 反 勝 332^P
 鼓動 なる 13 再び 新頁2行

のようなものかモヤモヤと舞い昇っていくよ
 うに見えた。
 「驚き」と「恐怖」
 せんばかりであつた。高鳴る心臓の鼓動が気が落ち着
 いてきた時、梯子はもう一度、恐る恐る「及び腰」
 なからも、小箱の中を覗き込まずに、お水な
 かつた。
 「おや、何かがまた箱の中に残つているよ
 うだが、――あの円いものは何なのだろうか
 怪しみなながら梯子は、箱から「と」白
 粉にまみれた円盤状のものを取り出した。
 「それは、白粉の粉を浴び、真白になつて
 まつた小さな鏡であつた」
 「亀比売よ。私は貴女との期要に乖違い
 何という大変なことをしてまつたのだらう。
 あんなにも固く誓ひあつたのに、その期を踏
 み躍つた私を、どうか許しておくれ」
 鏡を手にした時、何故か「ら、突然にも心
 の奥深くから後悔の念が「ドツ」と湧き上がつ
 てきて、――梯子は、その身をよじり、恐
 れぬなないた。
 日御子の形見のその小さな鏡を確りと両手

せまう 香日 1236 569.3.22 2.104 2115-1/2 1194 1616 2132
 弱弱 (2294) 身悶 1858

の中に握り締め、己の胸に緊と強く押しあ
 てたまま、――梯僦は、いつまでもいつまで
 も、身もたえし泣いていた。
 悲しみは、いよいよつのるばかりであつた。
 梯僦は、途方にくれ、ひくひくと泣き噤り
 なから、白い粉がまだ残る鏡の面をそつと袖
 で拭いて、何気なく鏡の中に目を注いだ。
 と、どうしたというのだらう。鏡の向うに
 は何と、一人の老爺の姿が写っているのだつ
 た。
 へおや、近くにどなたかがおられるのかな
 驚いた梯僦は、振り返り、あたりをつくづ
 く見回した。
 いかになからどうも不審なことに、梯僦
 自身の他には、だれも人としてあたり屋な
 かつた。
 「こ水は、もしかしたら私なのだらうか」
 鏡中の年老いた男は、弱々しく呟いた。
 なんとも哀れなその姿には、どう見ても、
 香るばかりに端整で威風堂々としていた昔日の

21026斤 抱き締め

201-128 寂

たま おぐい
玉の小柳 2072
-72

2,105P

万三-387P

金巻から 441
2011.10.00

あの面影など無かった。

梯儼は、心の内では、
肯定したくなかった。

しかしどうやら、悲

として認めざるを得ないようであった。

その場に立ちつくし、言葉もなく見つめる

その鏡の中には、あんなにも黒かった髪も白くなり

膚が皺み、あんなにも黒かった髪も白くなり

はてしてまった老梯儼が、ただ呆然とし

て、目をしばたいていた。万巻九一七

老け込んだ情け無い

四〇参照

己の姿に見入っている梯儼のかたわらには

もとは髪に飾ってくれていた婦人の

小柳がたった一つポツンと離れて

寂しげに転がっていた。

そして、上蓋が開いて中身の全てがこぼれ

舞い散ってしまった白粉の容器が、空しくも

玉手箱の中にひっくり返っていた。

なお、参考迄に述べると、

く口惜しいものの事実

ことながら

H30(2018)5.25(金)〜5.27(4回)

IF

1511 7/11/20
所持 持っています

2.106P

どうして なる 洞庭湖 1575 長沙墓の奇跡 4.8K 37P 湖南 820P 長沙 1011P

「中国湖南省長沙市（武夷山の西方、洞庭湖の南）の、馬王堆と称される前漢の墓から、奩と呼ばれる化粧箱（直径三十三センチ、高さ一〇・五センチ）が見い出された。

この円筒形、二段重ねの化粧箱には、口鏡、口はけ、口小刀など一式と、小さな入っけて、その小箱の中には口白粉が入ったままであつた。

という。（週刊朝日「長沙漢墓の奇跡」一九七二年、四頁、三七頁参照）

*

容器が